

21世紀ろう教育への提言

》29

「新たな潮流を受け入れ 変化しつつあるろう教育」

立 入 哉

八月二十八日の朝日新聞朝刊で「聴覚障害、新生児に検査」との新聞報道がなされた。この記事に関して、全日本ろうあ連盟は厚生省・朝日新聞社に対し質問状を出し、「障害児を『健常児』に『近づける』ことを第一義とし、また、ろう学校はいわば『必要悪』であつて普通学級に通えるようになることが『善』であるとする思想が横たわっている」との指摘を行つてゐる。

過去のろう教育は「近接化の教育」を主とし、いかに近づけるかという価値観で、統合教育を結果として推し進めてきた。しかし、この目標下で聴学校は児童生徒数を失い、今度は聴学校の存在を維持するために別の目標を探らざるを得ない状況とな

するセンター的機能を持つ方向を探らせる結果となつてゐる。聴学校はいわば脱皮と次への摸索期にあると考えている。そして模索の中から主張がなされた学校は、児童生徒数の増加という現象が起きている。

しかし、このような論議 자체が成立するろう教育の現場はどれほどあらうかと悲観してしまふ実態がある。九七年度聴学校教員の聴学校教員免許状保有率は二十九%であり、異動で聴学校で来た教員の同免許状保有率は七%、新採教員の同免許状保有率は十九%であった（これらの

保有率は年々減少する傾向にある）。聴学校教員免許状の保有が専門性の証とはならないものの、聴覚障害・補聴・手話などの理解ができ論議に加わることができるような期間（年数）、聴学校で奉職し続けることができない強制異動が行われている。また例年、聴学校が必要とする新採教員の数に見合う聴学校教員免許状を持った新採教員合格者数が少なくて、需要を満たせない状態である。

ろう教育を進める教員にろうの人

シヨンモードに関するこ十年ほどの間の論議は、障害を持つ者のみが常にその克服を迫られると言う構図を崩し、「聞こえないこと」を受け容れ、「聞こえないなりの生き方」を具現化し、もつて社会の一員たる聴覚障害者を育てようと言う教育目標を立てるに至つた。

以上の二つの流れは、現象として聴学校に手話を積極的に取り入れる姿勢の打ち出しどと、聴学校が持つ専門的教育技法を聴学校以外にも提供するセンターモードによるものである。ぜひ、志ある諸子は門戸を開いて欲しい。

最後に全日本ろうあ連盟による質問状から再度、引用したい。「ひとりひとりの聴覚障害児が、ますます発達してゆく科学機器の利用や訓練を通じて音声言語を身につけるために努力することは極めて大事ですが、同時に社会もまたそのあり方を変え、手話が自由に通じ、手話通訳が保障される社会を目指す必要があります」。

今、ろう教育は多様な価値観、多様な教育法、多様なサービス提供機関としての「多様さ」を取り揃え、社会に選択肢を示せる段階に向かいつつあると思つてゐる。

今後、ろうの教員の採用を含め、

教員の専門性の確保と資質の向上、さらにその上で上述した方向性を確固とするための方策が必要となる

う。

(たちいり はじめ／愛媛大学教育
学部助教授)

よにやり通したんだ」といった自信に満ちあふれていました。

浜松ろう学校へ入学。知的障害を合わせ持っている娘にとつて授業は何もわからずお客様でした。しばらくして、担任からクラスを分けて、この子供達に合った教育をするお話を

があり、生活習慣の自立を取り入れながらの教育が始まりました。今までにない取り組みをして頂き、又、良い方法だと解っていても、やつぱりショックでした。

トといっしょの旅行です。この時も帰つてから私に言った言葉は、「みんなといっしょに行つた」の喜びの声でした。学校が違うわけでもないのに、一泊の旅行にみんなと行けた

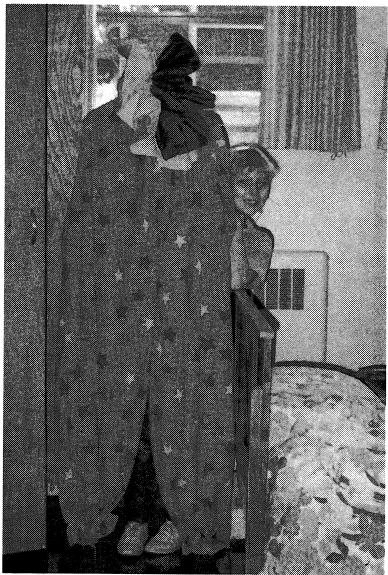
と喜ぶ娘の言葉に、「自分も常にみんなといっしょにやりたいんだ」と言つた心の叫びを聞いたように思いました。6年間で2回聞いた「みん

「みんなといっしょ」の言葉

松下 美美

9月29日に、娘は23才になりました。「私は23才になつた。大きくなつた」と喜んでいる本人。私達親も娘の成長を喜ぶと共に、心の片隅に素直に喜べないひつかかるものがあります。それはなんだろうか? 今から23年前。昭和51年9月29日に仮死状態で生まれ酸素欠乏。命を救う為の治療。そして3ヶ月の入院でした。その後は全てに遅れ遅れの成長

でしたが、4才の誕生日に近いある日、突然言つたかのように「カーチヤン」と呼ばれた時には、何回も何回も言わせては「言葉を忘れないで」との思いで一杯だった事を鮮明に覚えています。補聴器をつけて2年6ヶ月後に聞いたうれしい言葉でした。理解ある地域の保育園に通い、娘なりに一生懸命みんなの後をついて来ていきました。年長の時、お泊まり保育に参加。初めて親から離れた生活に不安があつたと思います。しかし本人はみんなといっしょに過ごせた喜びで、私の顔を見るなり「いっしょ」の片言で喜びを現わしてくれました。その時の娘は「みんなといっしょ



（まつした みよし／静岡県・まつほつくりの家）

トといっしょの旅行です。この時も帰つてから私に言った言葉は、「みんなといっしょに行つた」の喜びの声でした。学校が違うわけでもないのに、一泊の旅行にみんなと行けたと喜ぶ娘の言葉に、「自分も常にみんなといっしょにやりたいんだ」と言つた心の叫びを聞いたように思いました。6年間で2回聞いた「みん

なといっしょ」の言葉は重く娘の事を考える上で大切にしています。卒業後、コミュニケーションを大切にし、生き生きと働く場、ろう重複障害者小規模授産所「まつぼづくりの家」に通っています。娘は、「10月は新しいパンをつくる」とメニューになりました。そして「関東地区ろう出来、子育ての悩み等話し合え力になりました。同じ重複クラスの親達のつながりもこの体制の中で寄宿舎生活も経験し、娘もいろいろな面でのびました。

重複児（者）の家族と関係者のつどい」（以下「つどい」）の開催を知りました。今までの研修会など「自分の子供にあてはまらない」と不満を持っていた私には、「これだ」と思いました。参加して娘のようなるまい。しかし、誕生日を迎える「ひつかかるもの」は、まだ娘の社会自立に不安があり、親が元気なうちに何が出来るのか?のあせりもあるからかもしれません。教育の場や卒業後の働く場で孤立しないで、過ごせる社会。そして、県・市・町で異なる制度内容も格差をなくし、一人でも安心して暮らせる社会環境であつて欲しいと願っています。

（まつした みよし／静岡県・まつほつくりの家）

トといっしょの旅行です。この時も帰つてから私に言った言葉は、「みんなといっしょに行つた」の喜びの声でした。学校が違うわけでもないのに、一泊の旅行にみんなと行けたと喜ぶ娘の言葉に、「自分も常にみんなといっしょにやりたいんだ」と言つた心の叫びを聞いたように思いました。6年間で2回聞いた「みん